



👁️👁️ みどころ

「雲南3部作」の第2作のポイントは、イ族、帰家そして龍舞隊！

また検討の視点は、ズブの素人であった李敏（リー・ミン）から、ポスト“チャン・ツイイー”の呼び声が高い張静初（チャン・チンチュウ）へのヒロインの変更だが、その功罪は・・・？

ワタシ的には、コメディタッチで演技・演出過剰気味の第2作より、ほのぼのとした静かな第1作の方が好みだが、さてあなたは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■星5つ女優のチャン・チンチュウに注目！■□■

ネットユーザーが選ぶ「2007年度映画俳優賞」を受賞したのが、ポスト“チャン・ツイイー”の呼び声が高い張静初（チャン・チンチュウ）。近時彼女の株は急速に上がっているが、私の評価では中国四大女優と呼ばれている①章子怡（チャン・ツイイー）、②徐静蕾（シュー・ジンレイ）、③周迅（ジョウ・シュン）、④趙薇（ヴィッキー・チャオ）に比べると、美人度においてイマイチ・・・？もちろん、それを補う演技力は十分だが、1980年生まれの彼女は中央戯劇学院監督科を卒業後、女優の道に進んだというから驚き。

そんなチャン・チンチュウについては、初主演で高い評価を受けた『孔雀 我が家の風景』（05年）で詳しく紹介した（『シネマルーム17』176頁参照）。また、彼女は『SEVEN SWORDS セブンソード（七剣）』（05年）でも、村長の娘役として重要な役割を果たしていた（『シネマルーム17』114頁参照）。この2つの作品とも私の採点は星5つだが、それは作品の出来が星5つなら、女優チャン・チンチュウの出来も星5つということ。なお、『ラッシュアワー3』（07年）は星4つだが、この映画での彼女の

出番はホンの少ししかないから、女優チャン・チンチューの採点はムリ（『シネマルーム15』98頁参照）。

■□■星5つ監督チアン・チアルイとのコラボは・・・？■□■

他方、『雲南の少女 ルオマの初恋』（02年）で監督デビューし、直ちに私から星5つの評価を得た監督が、現在大地震で苦しんでいる四川省の成都出身で北京電影学院監督科を卒業した章家瑞（チアン・チアルイ）。『雲南の花嫁』は、そんなチアン・チアルイ監督の「雲南3部作」の第2作だ。

第1作はドキュメンタリーに近いので、女優ではなく地元の少数民族の女性李敏（リー・ミン）をヒロインに選んだが、第2作はそれとは正反対に実力派・演技派女優チャン・チンチューを起用することに。

さて、星5つ女優と星5つ監督のコラボはいかに・・・？

■□■第2作のポイントは、イ族と帰家■□■

ひと口に中国最南端に位置する雲南省といっても、その面積はバカ広いし、人口も約4300万人もいる。そして「雲南省の25の少数民族」と言われるとおり、雲南省には人口5000人を超える少数民族が25もあり、その総人口は雲南省全体の約3分の1とのこと。

第1作は、「ハニ族といえば棚田、棚田といえばハニ族」と言われているとおり、ハニ族と棚田がポイントだったが、第2作のポイントはイ族と帰家。イ族は雲南省最大の少数民族で、人口は約700万人。そんなイ族では、結婚した男女は3年間別々に暮らし、その間結ばれてはならないという古くからのしきたりがあるらしい。そして、3年後に妻が夫の家に入ることを“帰家”というとのこと。

■□■龍舞隊とは？この映画の構想は？■□■

プレスシートによれば、「龍舞」は「中国に古くから伝わる芸能で、春節に豊作を祈願して舞うとても縁起の良いもの。中国の象徴である龍は元氣と繁栄のシンボルとして、長い歴史の間人々に愛され続けてきた。また、お祭りや慶行事などで最も盛り上がる民間芸能の出し物の一つでもある」とのこと。ネット情報で調べたところによれば、これは全長25mの「龍」を9人がかりで持ち、「玉」を1人、「太鼓、銅鑼」などの鳴り物が5人、合計15人で舞うものらしい。

また、チアン・チアルイ監督が「雲南3部作」の第2部に龍舞隊を登場させるという構想を得たのは、雲南省の石屏県哨衝郷のイ族の女性からなる龍舞隊のチームが、1999年に全国龍舞大会で優勝し、一躍有名になったためとのことだ。ちなみに、この龍舞は長崎や神戸、横浜で見られる「蛇踊り」の原型だが、鳳美（フォンメイ）（チャン・チンチュ

一)と阿龍(アーロン)(印小天/イン・シャオティエン)との恋愛模様だけではなく、その厳しい練習風景にも注目!

■□■私が雲南省旅行で見た少数民族は・・・?■□■

私は2004年11月28日~12月5日の雲南省旅行で、西双版纳(シーサンパンナ)・昆明・麗江・大理を回ったが、その中で私が知った少数民族はナシ族、ハニ族、イ族など。

①雲南省の省都昆明は大都会だから、少数民族はあまりいない。しかし②3連泊した美しいまち麗江にはナシ族(納幼族)(人口約28万人)が、③大理にはペー族(白族)(人口約160万人)が、④西双版纳にはタイ族(〔イ泰〕族)(人口約160万人)がいる。また、ツアーでいろいろ見学したことによって、イ族(彝族)(人口約700万人)、ハニ族(哈尼族)(人口約125万人)、ミャオ族(苗族)(人口約740万人)などの少数民族の名前と特徴を知ることができた。

「雲南3部作」の第2作でとりあげたイ族の歴史は古く、雲南省にもともと住んでいた昆明人は彼らだと言われているらしい。自らを「白い人」と呼ぶペー族は白い衣装が特徴だが、イ族の衣装の特徴は赤。そんな美しいイ族の民族衣装もしっかり確認しよう。

■□■演技の巧さと演技過剰は紙一重だが、あなたは・・・?■□■

チャン・チアルイ監督の「雲南3部作」の第1作『雲南の少女 ルオマの初恋』が、ベルリン国際映画祭やモントリオール世界映画祭で高い評価を集め、また多くの日本人が絶賛したのは、私の分析では、ズブの素人である地元の少数民族の娘リー・ミンを主役に起用し、ハニ族の娘ルオマの初恋の実態を瑞々しく描いたため。つまり、張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『初恋のきた道』(00年)や霍建起(フォ・ジェンチイ)監督の『山の郵便配達』(99年)を愛する日本人は、こんな素朴で心温まる映画にホロリとくるわけだ。

しかし、第2作である『雲南の花嫁』はそんな第1作とは対照的に、演技力抜群のチャン・チンチューを起用したうえ、ストーリーの起伏がすごく激しいから、チャン・チンチューの演技力の見せどころがいっぱい。また、そんな自分の役割をしっかりと自覚しているポスト“チャン・ツイイー”たるチャン・チンチューはその要請どおりの演技を見せている。それを演技の巧さと見るのか、それとも「演技過剰」と見るのかは紙一重。

映画全般を通じてチャン・チンチューはコメディタッチの演技を見せるが、私には過橋米線(ビーフン)を食べる2つのシーンの過剰演技が目についたうえ、隣村の男子龍舞隊のリーダーに半裸姿で「相撲で勝負」というのは、いくらじゃじゃ馬のフォンメイでも、過剰演出・過剰演技では・・・?

■□■さて、クライマックスは・・・?■□■

